

東京医療保健大学大学院 医療保健学研究科 看護学(博士)
博士論文 要旨

首都圏内一自治体の5歳児健康診査受診者における軽度発達障害と
出生体重・出生週数、3歳児までの親の育児不安との関連

東京医療保健大学大学院
医療保健学研究科 看護学(博士)
博士課程
学籍番号 HD120006
氏 名 山本 三希子

背景

軽度発達障害とは自閉スペクトラム症(ASD)、注意欠如・多動症(ADHD)などの一部の発達障害を指し、乳幼児健診では ASD と ADHD を中心とした早期発見が期待されている。海外を中心に ASD や ADHD との関連が報告されている出生体重と出生週数は国内では検討が少ない。また親の育児不安にかかわる育児不安、育児困難感、抑うつ(EPDS(エジンバラ自己評価票)、親子の情緒的絆(Bonding 尺度)は自治体で複数回評価されているが、軽度発達障害との関連は未だ明らかになっていない。軽度発達障害と育児不安にかかわる指標との関連が時期別にわかれば、親の育児不安及び子どもの発達に対する要支援時期に適した支援体制の構築へつなげられる。

目的

5歳児健診の軽度発達障害所見と、出生体重と出生週数、3歳児健診までの親の育児不安にかかわる指標(育児不安、育児困難感、EPDS、Bonding 尺度)との関連を明らかにする。

方法

首都圏内一自治体で5歳児健診を受診し妊娠期からのデータが得られた親子1490組を対象に母子保健データを二次利用した。分析には多重ロジスティック回帰分析を用い、目的変数の5歳児健診の診察所見の「ASD or ADHD」と「その他の発達所見」を「発達所見なし」とそれぞれ比較した症例・対照研究を行った。説明変数は、出生週数・出生体重、育児不安とした。記述統計、2変量間分析で検討した上、低出生体重と早産は「早産 or 低出生体重」、育児不安と育児困難感は「育児不安 or 育児困難感」として、先行研究からの共変量を調整変数として用いた。全ての指標は新生児期、3歳児健診までに分けて分析をした。

結果

5歳児健診の診察所見は「ASD or ADHD」281組、「その他の発達所見」252組、「発達所見なし」957組であった。対象者全体のうち、低出生体重2.0%、早産5.1%、新生児訪問のEPDS9点以上10.0%、Bonding 尺度3点以上20.7%、3歳児健診の育児不

安あり 3.9%、育児困難感あり 14.6%であった。「ASD or ADHD」と「その他の発達所見」は、新生児までに得られるデータの「早産 or 低出生体重」「Bonding 尺度(3点以上)」とは有意な関連がみられず、「育児不安 or 育児困難感」(3歳児健診)とは有意な正の関連がみられた(「ASD or ADHD」OR:3.21, 95%CI:1.82-5.67、「その他の発達所見」OR:1.98, 95%CI:1.09-3.62)。

結論

3歳児健診で育児不安にかかわる指標に該当の場合は、軽度発達障害の特徴が顕在化する場合に備えて健診後の支援方針を検討する必要がある。自治体で新生児期までに把握できる低出生体重と早産は該当者が少なかったこと、Bonding 尺度と EPDS は欠損値が多かったことから、対象者数を増やした更なる研究が必要である。

キーワード

軽度発達障害、5歳児健康診査、出生体重、出生週数、育児不安